If in pop'n music

D－Dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｉｆ　ｉｎ　ｐｏｐ，ｎ　ｍｕｓｉｃ

【Ｎコード】

Ｎ３３０６Ｚ

【作者名】

Ｄ－Ｄｒｅａｍ

【あらすじ】

ポップンの俺的二次創作短編集的なものです。各話は（ほぼ）繋がっておりません。もしも要素や俺設定要素が特に強いと思われる作品にはタイトル名に＊をつけてあります。また、作者の気まぐれで大量に更新したり、長期間放置したりすると思いますが、ごゆるりとお付き合い下さいませ。（タイトルへの（文法的）ツッコミは胸の奥へしまってください）

＊戦う・魔法・道具・逃げる

＊もしもポップンがロールプレイングゲームだったら

名前：六（ろく）

職業：書道家、侍

装備：大見解（筆）、一撃必翔（刀）

技能：男々道（物理）、雪上断火（刀）、路男（特殊）

所属：Ｄｅｓ－ＲＯＷ・組

能力：攻８９　守６５　速５５

名前：鬼（おにび）－Ｂｅ

職業：妖霊

装備：なし

技能：深超深ＴＩＯＮ（特殊）

所属：あさき家

能力：攻５６　守１９　速２８

名前：？（はてな）

職業：神の付き人

装備：トライデント

技能：ニエンテ（必殺）

所属：ＭＺＤを働かせる会

能力：攻∞　守∞　速∞

「神ってば、？をひいきしすぎー！」

「だって、？はかわいいもんな」

「ハテナは？」

「ハテナは仕事仕事うるさいし、怖い」

「……ご主人ん？　仕事が溜まってますよ？」

「ハ……　ハテナ……」

「おしゃべりしてる暇はないんですよ？　仕事が終わってからにし

ましょうね？」

「ちょ、まっ……　イャァァア！？」

「……神、逝ってらっしゃい」

「……神の悲鳴って、なんか女の子みたい……」

凜として鳴く猫の如く

「ノワール、どこ行ったのー？　出ておいでー」

金髪の少女が1人、飼い猫の名前を呼びつつ歩いていた。

「どうしたの、お嬢さん？」

長めの髪。無精髭。

少女に声をかけたのは、あまりにも胡散臭い匂いがする男だった。

「飼い猫が迷子になってしまって。もうすぐお稽古の時間なのに」

少女は見知らぬ男に話しかけられたにもかかわらず、躊躇なく口を開いた。

「それなら、かわりに探しますよ」

「いいんですか？」

「俺、なんでも屋してるんです。Ｍｒ．ＫＫのなんでも屋っていうね」

男は商売用の愛想笑いなのか、にっこりと微笑んだ。

「じゃあ、お願いしようかしら」

「クライアントであるお嬢さんの名前を伺ってもいいですか？」

「ベルです。えっと……　ＫＫさん？」

「おまかせください。ベルさん」

ＫＫはもう１度微笑んだ。……どちらかと言うと、ニヤリといった感じの微笑みだったが。

「ノワールー。どこだー」

ニャー

「そこか！　待て、猫！」

ニャーン

どうやら、猫の方が１枚上手なようだ。駆け出したＫＫの腕の間を黒猫がすり抜ける。

いや、動物の本能がＫＫの本分をかぎとった、とでも言うべきなのだろうか。

「……ベルさんとの待ち合わせまで、あと１０分か」

ＫＫの雰囲気がフッと変わった。

「このお店で待ち合わせだったわよね」

稽古事の終わった私は、そのまま待ち合わせ場所の店へと向かっていた。

『Ｄａｙｓ』そう掲げられた看板を見て、軽く深呼吸をするとドアを開けた。

「おや？　初めての方ですね。……ベルさんですか？」

入るなり話しかけてきたのはＫＫではなく、黒髪の青年だった。青い左目に黄色い右目――そのオッドアイに、なぜか懐かしさを覚えた。

「はい。ＫＫさん……猫を連れた人が来てませんか？」

「来てますよ。ＫＫさん、ベルさんが来ましたよ」

奥の方へ青年が声をかける。ＫＫの返事の変わりに、猫の鳴き声が返ってきた。

「あ、ベルさん。ノワールはこの子であってますか？」

姿を現したＫＫの腕には、黒猫が抱かれている。

「ええ。ありがとうございます」

ＫＫとかわって、猫を抱いた。飼い主の腕はやはり落ち着くのか、ノワールは少し眠そうにあくびをした。

「あの、お礼に……」

財布を出そうとすると、ＫＫはそれを制止した。

「お礼はかわいいお嬢さんのその笑顔で十分だよ。じゃあ、また」

「あ、ありがとうございました！」

去っていくＫＫに、慌てるようにお礼を言い直した。

心なしか、顔が熱い気がする。

「彼に惚れると大変ですよ、ベルさん」

笑い混じりのそんな声が、後ろの店主から聞こえた気がした。

いつか宇宙（　ルビ：そら）　へ（前書き）

本文中では名前は出てませんが、ライトの話です。

いつか宇宙（ルビ：そら）へ

空が好き。

クジラも好き。

好きな空に近づけるから、飛行機はもっと好き。

「いつか僕の作ったクジラみたいに大きな飛行機に乗って、空を飛ぶんだ」

僕は夢を聞かれると、絶対こう答える。

だって、空が好きだから。

近づきたいから、

少しでも近づきたいから、飛行機の設計図を描く。

難しいことはわからない。

きっと、僕の飛行機はまだ飛べない。

でも紙に“夢”を広げるのは楽しい。

今日も僕の夢を製図に描いていく。

「はやく空に行きたいな」

「いや、宇宙だろ」

イア＝ラムセの訂正が入った。

ニャーと鳴く猫の如く

「……猫？」

「そう。猫」

ケンジの差し出した写真……ではなく、スケッチを俺はまじまじと凝視した。

さすが芸大生。細かい描写の見事なスケッチだ。

……きっと友人に描いてもらったんだろうが。

「人じゃなくて？」

「そう。人じゃなくて」

ケンジはコクリと首を縦に振る。

「同居人捜しっつーから、人だと思うだろ」

「猫だよ。同居してるのは事実でしょ？」

なんでだろ？

さっきから、ケンジはまばたきをしていないように思うんだが。

あの猫目は怖い。しかも、まばたきしてないし。

「捜してくれるよね？」

だから、その猫目は怖ぇんだって！

「俺とケンジの仲だしな。……分かったよ。ただし！」

……さすがに、その目が怖いとは言えねぇよな。

「俺だって、Ｍｒ．ＫＫのなんでも屋で生計たててる以上、謝礼はもらうからな！」

「捜してくれるたなら、僕もちゃんとお礼するよ」

苦笑いしながらもケンジはしっかりと答えた。

「ねこー。おーい、ねこー。……っち、名前がねぇってのも面倒なもんだな」

って、俺の言えた義理じゃねぇか。

「ねこー」

……Ｍｒ．ＫＫのなんでも屋を改名して、Ｍｒ．ＫＫの猫捜し屋にするべきか？

この前もベルの飼い猫を捜し回ったし。

１ヶ月の収入は、ほぼそれだけだもんな。

……月に6回も迷子になる猫も猫だが。

「ねこー」

……見つかんねぇ……。

結局その日は見つからず、あとに聞いてみると……。

「あ、ねこ？　うちに帰ってきたよ」

……そういうことは、早く言ってくれ。

＊双子以上オンガク仲間

「『吉高つよし』と『肥塚つよし』俺たちは2人で1人だ！」

「そうでございますね」

ニシシッと笑う笑顔。

のほほんとした笑顔。

2人のつよしの笑顔。

「僕たちは2人で1人でございます」

サンバイザーと王冠。

タンクトップと王子服。

緑髪と金髪。

共通なのは緑色をした目と名前だけ。

「不思議でございますね。こうして2人で話しているなんて」

「そうだなー。俺たち、元は1人2役だもんな」

苦笑い。

つよしの苦笑い。

「こう考えると、ＭＺＤってけっこう凄い神様だよな」

「そうでございます。僕たちを、１人を２人にしてしまうんでございますからね」

楽しそうな鏡合わせ。

双子以上にそっくりな２人。

＝じゃなくて∞でもない、≡の２人。

好きなものはいっしょ。

嫌いなものもいっしょ。

趣味も共通――

――音楽を奏でること。

占うは光　解き放つは未来

見える。

……見えない。

「まただ。また僕の未来だけ、ミエナイ」

様々な色の光が輝く水晶玉が白濁した。

さっきまでの明確なビジョンが消えていく。

僕は必ず当たる自分の占いが嫌いだ。

東西南北過去未来、なんでもお見通し。

でも“ジブン”に関しては何も見えなくなる。

直前までは見えていたイメージが霞んで消える。

時間が経つにつれて、見える時間が長くなってきてはいるんだけど……。

「占い師の方ですか？」

ふと声が聞こえた。

「はい。占いをご所望ですか？」

意識を現実に戻すと、目の前には赤いベールの女性が立っていた。
小豆色の目が微かにベールから覗いていた。
楽器を持っているところから、吟遊詩人をしているのではと推測される。
「いえ……　すみません。なぜだか、懐かしさを感じて」
見ると東洋系の顔つきをしている。
どこかで見たことある気がするが……。
それに、頭上のテールがざわついている。
「もしかして、ファティマかい？」
「やっぱり、アブラハムですね。久しぶり」
彼女の笑顔を見るのはいつぶりか。
「僕が一座を抜けて以来かい？」
「そうね。同じ街にきているなんて、偶然ね」
「水晶玉に導かれたんだ。この街に行くように」
一座に会いたいと願っていた。
占っても一座と会える自分が見えなかったから、諦めていた。

でも、会うことができた。

……これは、偶然なんだろうか？

「1曲聞く？　再会記念に」

無邪気に笑う彼女。

「そうだね。聞かせてもらおうか」

「何がいい？　ＧＡＤＡＲＩＮＡとか？」

「僕の曲、覚えててくれたんだ」

笑うファティマ。

つられて笑顔になる。

ファティマは座ると、スッと目を閉じた。

あぐらで安定する位置に楽器を置いて、ゆっくりと爪弾き始める。

儚げな旋律が辺りをかける。

１つの楽器だけで奏でられているとは思えない。

いつ聞いても、高い表現力だと思う。

「この曲は、私にとっても大切な曲だから……」

そう聞こえた気がした。

夕飯はきっとカレー

「ごはん～」

ジャックが拙い発音で、夕飯の準備を急かす。

「六、どこに旅立ったもんか……」

「ごはん～」

「わーったって」

慣れない手つきで、金髪の学生が準備を進める。

料理に付き物の「トントントン」という軽い音ではなく、「ゴトン、ゴトン」と不器用さを際立たせるような音が響いている。

「イテッ」

……いやな予感のする声があがった。

「ゆひふぃっはぁー（指切ったー）」

「リュータ、大丈夫（だいじょぶ）か？」

リュータは人指し指をくわえながら、うなずいた。

「ら、大丈夫（らいひょうふ）」

……どうやら夕飯にありつけるのは当分あとになりそうだ。

まいにち　さうす（前書き）

冒頭の文は、公式のキャラ紹介文から引用しました。

まいにち　さうす

だれもしらない　なんきょくのうみで
サウスはうたっていたよ
サウスはかぷかぷうたったよ

「♪～　♪～」

だれもしらない　なんきょくのうみ
まわりは　ペンギンだらけ
あたまのうえには　なんきょくてんのはた

「♪～　♪～」

くらげみたいに　ゆらゆら
くらげみたいに　ふわふわ

「♪～　♪～」

ふえる　あわあわ
みえる　ぶくぶく

あえる　ぷかぷか　くらげとともに

「♪～　♪～」

そこにいる

うた　うたってる

ことば　ない

うた　うたってる

「♪～　♪～　♪～　♪～」

ひびく　うた

ひびく　こえ

うた　うたってる

サウスは　うた　うたってる

だれもしらない　なんきょくのうみで

独白――世界観

「泣きたいトキは笑ってうたっちゃえばいいんだよ☆」

アタシの口癖。

だって、そう思わない？

ヤなコト全部、お空の向こうに飛んでっちゃうと思わない？

「……莫迦莫迦しいラブソングだ」

此の世界には莫迦莫迦しいラブソングが溢れかえっている。

窒息してしまいそうだ。

汚れちまった空気が俺のメガネを曇らせるんだ。

「夏の海と波の音と俺！」

サーフィンが好き。

誰がなんと言っても、サーフィンが好き。

雪はキライ。

サーフィンもできなきゃ、浜で昼寝もできやしない。

とにかく、サーフィンさいこー！！

「俺達は2人で1人だぜ！」

「僕達は2人で1人でございますー」

？？？

2人じゃない？

1人2役の間違い！？

そうとも言うかもしれないな。

でも、僕達は2人で1人でございます。

俺達の絆は強いんだぜ。

絶対に切れないのでございます。

学生達の日常（多分）

「興味ないで候」

「えー」

さゆりがナカジをゲレンデに誘っている。

ナカジはバッサリと切り捨てているが。

「いっしょに行こうよー」

「冬は出歩きたくない」

一歩も引かないさゆりとナカジ。

「それにスキー板持ってない、し……」

「なになにー？　なんの話しぃ？」

「お前……」

ナカジの言葉を遮（さえぎ）るように、ニッキーが現れた。

「ナカジ君をスキーに誘ってるの」

「ふーん……」

ニッキーがナカジをチラ見すると、さゆりの目を見て言った。

「こんな堅物くんよりも、オレとゲレンデ行かなーい？」

「うーん……。ナカジ君行かないんなら、ニッキーと行こうかなぁ？」

その言葉に、ナカジが急に立ち上がった。

「俺が行く」

ナカジはメガネ越しにニッキーを睨(にら)み付けた。

「こんなヤツとさゆりをいっしょになんかできない」

「オレ……　そんな嫌われてんの？」

「……まあ、変態だしねー」

タローののんきな声がしめた。

こんな日常。

ウヘコロとジャージがスーツ

「……プッ」

「わ、笑うなー！！」

「だって、スー……クックッ」

金髪を揺らして笑っているのは、金髪ウヘコロ英語教師ことＤＴＯだ。

笑われているのは新米熱血元ヤンジャージ教師ことハジメ。

なぜ笑われているかと言うと……。

「お前、スーツ着ると違和感ありすぎウヘッ」

そうなのだ。

いつもジャージにタオルとラフな格好のハジメが、珍しくスーツを着ているのだ。

「にしても、ククッ、なんでスーツなんか着てんだ？」

「今日は授業参観なの分かってる？　中等部の」

言われてポカーンとしたＤＴＯは、すぐさま「分かってます」と言わんばかりの表情を浮かべた。

「も……　も、もちろん分かってるコロ」

……分かっていないのは一目瞭然、いや一聞瞭然だが。

「おはよー」

そこにリュータが現れた。

遅刻確定ぎりぎりの時間帯だ。

「おはよう」

「おはよう。リュータ、遅刻するウヘー」

その言葉に、リュータは「は？」と言いたげな表情をした。

「……今日は懇談会で、高等部生は休みなんだけど」

そのリュータの言葉に、今度はＤＴＯが「え？」という表情を浮かべた。

「……まさか、高等部の教師であるＤＴＯが知らなかったなーんて……　あるわけないよね？」

「そ、そそ、そんなことありうるはずがないですらー」

ＤＴＯはフイと目を反らした。

……ポップン学園はこんな教師がいる、平和な学園です。きっと。

透明人間の夢から覚めた夢

カラフルな薬品棚。

ショッキングピンク、毒々しい赤、鮮やかな黄緑、鮮烈な青。

見ているだけで目が悪くなりそうだ。

「スマイル、ご飯できたッス、よ……って、何してるんスか！？」

「んー？　見ての通りの実験だよ。ヒッヒッヒッ」

青髪にカボチャのツル。それに部屋中に充満する煙。

透明人間の研究室は、現実とは思えない異様さを持っていた。

「朝からずっと部屋にこもってると思えば、やっぱり実験ッスか」

「起きたらカボチャが生えてたんだよねぇ。ヒッヒッヒッ」

スマイルは包帯（トレードマーク）も巻かずに実験を続けている。

鮮やかな2色を混ぜた途端に爆発がおき、試験管が割れた。

「朝からずっとこんな調子なんだよねぇ」

そういうスマイルの手元は、鮮やかに染まった机と試験管だった欠片で埋まっていた。

「今さら、眠っていた時の名残が出てくるなんて。本当、めんどくさいよ」

そう言いながら、スマイルは立ち上がった。

「今日はカレーかい？　いつもと違うスパイスの」

「そうッス。スパイスの配合をちょっと変えてみたんス」

アッシュは笑顔（スマイル）で返した。

料理の話の時は、本当に楽しそうに話す。

「机の上を少し片付けたらすぐ行くよ。ユーリは僕のカボチャに気付くかな？」

スマイルもそんなアッシュに冗談（スマイル）で返した。

＊変わることのない永遠の姿

「いらっしゃいませ」

にこやかに“入店者”に挨拶をした。

「古本屋か」

「意外と掘り出し物があったりするんスよ」

「そうそう。特にこの店は禁書なんかもあったりするんだよねぇ。ヒッヒッヒッ」

これは珍しい3人組だ。

しかも、そのうち2人は同じ匂いがするではないか。

「どんな本をお探しですか？」

「料理の本を」

「研究資料だよ。ヒッヒッヒッ」

同時に2人が口を開いた。確か、狼男と透明人間だった気がする。

「料理の本ならそちらの棚、研究資料なら奥の方の棚のあたりにありますよ」

「２００年前と配置を変えてないんだな」

「ミシェルくんだもんねぇ」

吸血鬼と透明人間は、それだけ言うと自分の目的の本を見に散っていった。

「この郷土料理は美味しそうッスね……」

料理本の棚の前では、人狼がレシピを吟味している。

やはり、人が目を輝かせながら本を読む姿を見るとうれしくなる。

「この本くださいな」

「ありがとうございます」

不定期に店を開けているが、いつも来てくれる常連は研究資料をカウンターに置いた。

２００年も通い続けるなんて、この人たち以外浮かばない。

＊変わることのない永遠の姿（後書き）

アルフォンス・ミシェルは人外に位置する気がするのです。
翼とか、覚醒とか。
絶対、不老不死ですよ。ここまでくると。

っていう思いを込めました。

教訓「二度寝には気を付けろ」

ピピピ

電子音の目覚ましが、甲高い声をあげた。

「うー」

寝具の中から手が伸びて、目覚ましの音を止めた。

「さ、さむい……」

音を止めた手は、体温で暖まった寝袋へとすぐに帰っていった。

冬の朝は冷える。

これといって寒さ対策をしていない、それも入口に何もない洞窟は特に冷える。

「……ぅん？」

もう1度手が伸び、目覚まし時計を連れて寝袋に帰っていった。

「うわぁぁぁぁ！　遅刻だぁぁぁ！！」

よくあるパターンよろしく、カジカは跳ね起きた。

跳ね起きた勢いそのままにベチョッと転んでしまったが、そんなことを気にする余裕もなく慌てているようだった。

「今日は絶対遅れられないのにっ！」

少年は慌てて、寝袋を片した。片そうとした。

いつもならスルリと抜ける寝袋に足を絡めてしまって、うまく抜けないでいる。

「落ち着け！　僕、落ち着け！？」

暖かい寝具につい二度寝をしてしまった自分にイラつく少年の横を、昨夜サナギから変体したばかりのチョウが優雅に飛んでいく。

「Ｄｅｓ家・年末の大掃除☆大作戦（ミサキ命名）」に遅れた少年（ジカ）をあざわらうかのように。（カ）

生プリン（うさぎ）と芸大生（ねこ）

プリン。

特大プリン。

生クリームが乗った特大プリン。

それを見つめる少女。

頭には青い青いリボン。

うさみみのようにピンと立ったリボン。

「これ、アリシアのだからねっ！　ケンジにはあげないからねっ！」

「ははは、どうぞ。僕はとったりしないから、ゆっくりお食べ」

青年はコーヒーに砂糖とミルクをたっぷり入れた。

黒の中に白の渦巻きができる。

ケンジは色が混ざりあうまで、マドラーを動かした。

その目の前でモクモクとアリシアがプリンをほおばって、幸せそうな表情を浮かべている。

「アリシア、美味しい？」

「うんっ」

少女は幸せそうに笑った。

聖夜終了直前の麋（前書き）

タイトルの麋はトナカイと読みます。

聖夜終了直前の禊

「メリークリスマスだｙｏ」

……こ、こいつは……！

今いったい何時だと思ってやがる……！

「さて、子供たちに夢をまいて、いい大人たちにも夢をまいて、キングオブダメな大人のお前にプレゼント」

チクッと攻撃的な口上だこと。

つか、言っときながらプレゼント出すの遅いし。

袋の音うるせぇ。

「じゃっじゃーん！　そこのコンビニで買った安い方のシュークリームー」

「……そのために、俺は夜中にたたき起こされなきゃいけなかったのか？　しかもお前が袋漁ってるあいだに２６日になったぞ、ウヘェ！？」

その後、デイブの姿を見たものはいない。

部屋には「ＤＴＯを怒らせてはいけない」という書き置きがあっ

たそうな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3306z/

If in pop'n music

2011年12月26日23時50分発行